

本を選ぶ

NO.394 2018年(平成30年)3月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <くろん・ぼわん>『銀のしずく文庫』から広がる世界
- 紙魚の繰り言 第19回
- 高野病院の物語
- 図書館を離れて(第38回)
- 帰ってきた図書館員(53)

●●●●●くろん・ぼわん●●●●●

『銀のしずく文庫』から広がる世界

琵琶湖の中央部の東岸、人口2万3千人の町の能登川町立図書館(2006年1月、合併により東近江市立能登川図書館)で、『銀のしずく文庫』を設けたのは2001年4月のことだ。町内に住む鷺坂健一さんの寄贈によるもので、鷺坂さんが若い頃北海道を旅して以来、目につく限りアイヌ関連本を買いつけてきたという約170点の図書の中には、知里幸恵がアイヌの人たちが口伝に受け継いできた物語を、アイヌ語をローマ字で表記し、それを「詩的な奥行きのある」美しい日本語に和訳して書きつけた『アイヌ神謡集』の原稿となるノートの復刻版もあった。その収集に並々ならない思いと尽力が窺われた。図書館を利用する幾人もの方からよくもこのような本を手にてきてと喜びの声を聞いた。

2004年5月、京都にある立命館大学国際平和ミュージアムで知里幸恵生誕101年を記念して《知里幸恵『アイヌ神謡集』の世界展》が開催され、その会場で私は登別から来られた幸恵の姪の横山(知里)むつみさんにお会いできたのは思いもよらぬことだった。横山さんは1997年から登別で知里森舎を主催し「銀のしずく記念館」の建設活動に力を尽くされている最中だった。

2016年2月25日、私は登別を訪ねていた。登別

市立図書館での講演をと綿貫亨館長から声がかかり出かけたのだ。登別の図書館では図書館長を全国公募し、関西から応募されたのが綿貫さんだ。建物は築年数がかなり経った古い施設だが開架室の棚が生き生きしているのに驚いた。市民が「いつでも どこでも だれでも なんでも」利用できる図書館を目指し、市民一人ひとりに向きあうことを大切にする館長の明確な図書館への思いや考えを職員の方たちが同じくして動いている感じがじられた。図書館長は何をする人か、その働きがくっきりと見える登別の図書館を訪ねられたのは望外のことだった。

講演会の翌日、真っ白な雪が降り積もった知里幸恵のお墓を訪ねたあと、2010年に開館した『銀のしずく記念館』に向かい、館長の横山むつみさんと11年振りの再会、横山さんからは澄んだ眼差しでガンになっていることを告げられた。横山さんが津島佑子さんとフランスからきたル・クレジオさんを記念館の傍の広大な冬の庭に案内していた時、彼が林の中で、「スピリッツ」と呟いた話を心響き心通わせあったひとときとして話してくださった。その横山むつみさんが2016年9月21日、68歳で亡くなられた。

『知里幸恵とアイヌ』(小学館学習まんが人物館)、とりわけ裏表紙の見返しにある『アイヌ神謡集』序を声に出して読み、本を語り人を語り、そしてアイヌの世界を語って稀代の人である池澤夏樹の詩人の魂が感じられる解説を読むと、知里幸恵の声と共に知里むつみさんの笑顔が浮かんでくる。

(才津原 哲弘)

紙魚の繰り言 第19回

坂部 豪

『おなかのかわ』の類話が、もう一つあるのに気がつきました。井上洋介画、内田莉沙子文の『どろにんぎょう』（福音館書店、1985）です。副題に北欧民話とあります。明らかに、大食いのネコ系列の話です。英語の題名は *The Mud Boy, A Big Eater* です。

ただし、この話で片端から人を飲み込んでいく存在は、ネコとは似ても似つかない、おじいさんが作った泥人形です。おじいさんとおばあさんが出てきて泥人形を作るところまでは、『おだんごばん』ののんびりとした雰囲気を感じますが、話の趣は反対で、泥人形が大きくなっていくところは、絵のせいもあるでしょうが、ホラーのようで、不気味な雰囲気です。しかし、まあなぜ泥人形なのでしょう？

それに対して、その泥人形をやっつけるのはトナカイです。この点は、『はらぺこねこ』のヤギと似ています。さまざまな人が飲み込まれ、最後にトナカイが現れて、泥人形のおなかに角をぶすりとつきさすと、おなかかわれて、飲み込まれた人たちが助かるのでした。

そこで飲み込まれたのは、おばあさんと漁網を編んでいたおじいさん、桶と天秤棒を持った2人の娘、イチゴのかごを抱えた3人のおばあさん、3人の漁師に、斧を持った3人のきこりという具合です。ここでは、斧を持っているのに、斧で切り裂いて出てくるわけではないのですね。中から切り開くのと、外から開けるのとでは、何か違いがあるのでしょうか？ うーむ。課題です。

ところで…

実は、この『どろにんぎょう』の本を手に入れたと思い、あるアメリカ資本の大手通販サイトの古書コーナーを見ると、売っていました。ただし、図書館のリサイクル本だと断りを入れてあります。早速、注文して手に入れてみると、たしかに、千葉県の柏市立図書館の除籍本でした。除籍の印が

目立たない感じで押してあります。資料番号のバーコードラベルは赤のマジックでバツ印が付けてあります。蔵書印への消印はありません。1985年10月発行のものを1985年11月に受け入れています。使用感がありますが、頁が破れていたり、書き込みがあるわけではありません。表紙も自館装備でフィルムはかかっているし、背の天の部分も弱ってはいますが、ひどくはない。中古の商品としては、許容範囲内ではないでしょうか。

当時の価格が定価1000円となっています。私はそれを1199円プラス送料257円で購入しました。その出品していた業者は西東京市の業者です。現在、『どろにんぎょう』の本は品切れ中なので、古書の価格設定としては、まあ妥当な価格設定だとは思いますが、それが図書館の除籍本となると、話は別です。

図書館の除籍本でこのようなことがあるのは、元図書館員としては心外です。アメリカでは、図書館自らが除籍本を販売して、それを資料費にまわすということがあるというのを、たしかジェフ・アボットのミステリ『図書館の死体』（早川書房、2005）で読んだ記憶はありますが、日本ではあまり聞いたことはありません。柏市立図書館ではこの本を有料で販売したのでしょうか？ それとも、リサイクルとして、無料で配布したのでしょうか？ 次々と疑問が湧いてきます。一体全体、どういう経緯で柏市立図書館の本が、西東京市まで流れたのでしょうか？

柏市立図書館では分館も含めて、全体で現在17冊の『どろにんぎょう』を所蔵しています。冊数としては十分に足りていると思われます。その点では、書架の空きを少しでも作るためには、除籍もあり得ることかと思えます。しかし、それが個人にリサイクルで渡って、流れていったのかなど、事情が分かりませんので、何とも言えませんが。さらに、別の絵本でも同じような事態がありました。先と同じサイトで、2003年にALAのコレデ

コット賞をとったエリック・ローマンの『はなうたウサギさん』（BL出版、2004）を、1円プラス送料257円で入手しました。この本は、市立函館図書館（旭岡）の除籍本らしく、バーコードラベルの上に「除籍図書」という赤い印が押してあり、奥付にも「函館市中央図書館除籍処理済」という印が押してありました。

こちらは、新品と言ってもいいくらい状態は良く、フィルムがかかっているという意味ではマイナスかもしれませんが、個人で読むには十分な保存状態です。しかも、この本も現在品切れなのです。また、函館市図書館のホームページで調べた限りでは、現在、函館市図書館にはこの本は1冊しか所蔵がありません。コルデコット賞をとった本であれば、複本で所蔵していた方がいいと思うのですが。どうして、この本が除籍になったのか分かりません。理由があるとすれば貸出がなかったということでしょうか？

公立図書館で安易な除籍が行われていないのか、気になるところです。函館市図書館が指定管理になったことが、このことと関係しているのかどうかは、まだ確認はとれていません。

野良は野性的

我が家のシロが産んだ6匹の子ネコのうち、2匹が不慮の死をとげて、3匹がもらわれていき、今はシロにそっくりな白のオス1匹が残っています。亡くなってしまった茶トラの1匹は、早朝シロがいつもと素振りが違うので、ついていくと、道路向かいの空き地で冷たくなった遺体で見つかりました。シロが報せてくれたのだと思っています。今は残った1匹をチビと呼んでいます。

シロの方がぼっちゃりしているのですが、ぱっと見には区別がつかなくて、しっぽで判別しています。シロは曲がったしっぽ。チビはまっすぐなしっぽというわけです。ただ、大きな違いはシロは声がかすれていて、「ニャー」とは鳴けないということです。チビの方はエサが欲しいとニャーニャー鳴いて催促します。それどころか、朝食後

に庭を探検に出かける時には、ニャニャニャニャ、ニャーンなどと音程を付けて、一鳴きしてから、飛びだしていくことがあります。

チビは4月16日生れですので、もうすぐ1年を迎えます。もう、独立しなければならない時期なのか、シロが盛んに追いかけて回していますし、面と向かっても、シャーという威嚇の声をあげています。シロは避妊手術をうけさせたので、近親交配の心配はないのですが、本能のなせる業なのでしょうか、旅立ちを促しているのかもしれませんが。ただ、最近よそのネコがシロたちが縄張りと考えている領域（我が家の庭が中心ですが、両隣もネコはいないので、縄張りだと思っているでしょう）に侵入してくることが多く、共同で見張るためか、母ネコのシロと仲良くなってきたような気もしています。

シロたちが侵入者と考えているのは、キジトラ、太り気味の首輪をした茶、かなり大きい白などです。チビは最近後ろの左脚付け根あたりに一撃をくらったらしく、3cmぐらいがえぐれています。自分でなめて消毒しています。シロも以前にやられたことがあるのですが、そちらはすっかり治りました。

ところで、最近シロは狩人としての才能を発揮しています。ヒメネズミ、ヤモリ、カマキリ、小鳥、モグラなどを捕まえてきます。捕まえてくると、誉めてほしいのか、声にならない鳴き声をあげて知らせます。そして、ひとしきり遊んでから、物によってですが、食べます。

モグラは食べません。おいしくないのですかね。ネズミは食べます。だいたい頭からがぶっと食べることが多いようです。小鳥は小さいのは食べますが、大きいのは遊ぶだけです。コジュケイ、ヒヨドリなどを捕まえてきます。

ただ、ネコたちの主食はペットフードです。ドライタイプのもので、ウェットといいますが、生のものです。チビはドライタイプのものを食べる時が問題です。

（さかべ たけし）

高野病院の物語

—『たかのびょういんの でんちゃん』—

高野 己保

福島県が「フクシマ」と呼ばれるようになった2011年3月11日から、その地に暮らしていた人々の数だけ物語が生まれました。そしてその日、東京電力福島第一原子力発電所から22キロにある高野病院では、そこにとどまった病院スタッフと患者さん達の物語のほかに、「人ではないもの」の物語も力強く始まっていたのです。

物語の主人公は、やんちゃな男の子「でんちゃん」。推定年齢、10 発電歳。職業、停電になった時に電気を作る仕事。好きな食べ物、軽油。嫌いな食べ物、水。好きなこと、お昼寝と時々遊びに来てくれるみおちゃんとお話すること。嫌いなこと、定期点検でお腹の中をみられること。そう、主人公のでんちゃんは、高野病院に設置されていた「自家発電機」なのです。

でんちゃんは、昭和 55 年、高野病院が建てられた時に福島県広野町にやってきました。定期点検、落雷や強風での電線への異常で停電するほかには、ほとんど働くことがなく、のんびりとした日々を過ごしていました。

そんなでんちゃんの生活が一変したのは、東日本大震災の日。大きな地震の後の津波で、周辺の電柱がすべてなぎ倒され、海岸沿い一帯が停電してしまったのです。そこに追い打ちをかけるように第一原子力発電所の事故。広野町は町ごとの自主避難を決め、町の中には誰もいなくなりました。当時の高野病院の院長は、SPEEDI（スピーディ）より正確に、風向きを読み取り、避難するより病院にいる方が安全だと判断。百数名の患者さん達と十数名のスタッフたちと病院に残る判断をしたのです。

電気も水も物流も、すべてが止まった町で、院長と残ったスタッフたちの壮絶な患者さん達の命を守る物語が進む中、でんちゃんもまた、必死に電気を作り続けました。電気で動く医療器械を使わなければ、命の危険がある高齢の患者さん達がたくさんいたからです。患者さんの命を守るため

に電気を作り続けたでんちゃんの物語と、でんちゃんを動かすために頑張ったスタッフたちの物語が重なったのです。

高野病院の物語は、のちに世の中に知られることになりましたが、でんちゃんの物語は、電気がついたと同時に終わりをむかえ、そのまま私たちの記憶

の奥深くにしまわれました。

原子力発電所の事故が、私たちから多くのものを奪っていったから7年。私たちは毎日を生きることに必死で、失ったものを顧みる余裕などなかったのです。いつしか自分の中にあった、あの時の緊迫した記憶も薄れていっている気が付いたとき、決して奪われてはならないのは、事故前の日々のささやかな日常と、事故の時の感情や記憶ではないのか、そう思えたのです。

震災の後に産まれた子供たち、震災の時に小さかった子供たち、大人だったけど、記憶が薄れてきている人たちへ、でんちゃんは自分の物語を通して、あの日々を語ってくれると思っています。機械のでんちゃんだって、あの日々を乗り越えた物語の主人公なんですから。きっと震災の記憶を、優しく静かに、押し付けることなく、「えへへ」と笑いながら、思い出させてくれると思います。

動かない自家発電機の描写を、「メルヘンでお願いします」と、リクエストをした原案者のイメージ通りに、躍動感あふれる「でんちゃん」を描いている菅野博子さんの、力強くも繊細な絵と合わせ、でんちゃんのお話を聞いて、これからもずっと「あの日」を心の中に留めていただきたいと思います。患者さんとスタッフの命を守るためだけではなく、その先にある未来への光をも作り続けてくれたでんちゃん。これからはみなさんのそばで、心の中に明るい光を灯してくれますよ。一家に一台（冊）自家発電機の「たかのびょういんの でんちゃん」、設置をお勧めします。

（たかの みお：医療法人社団養高会高野病院）



『たかのびょういんの でんちゃん』文・絵 菅野博子
原案 高野己保／32 ページ
／定価／1400 円（税抜き）
／岩崎書店／2018 年 2 月刊

図書館を離れて (第38回)

—「ちびくろさんぼ」のドーナツ 3: ホットケーキからパンケーキへ—

並木 せつ子

私が子どもの頃見た「ちびくろさんぼ」ではなかったが、ドーナツ版があったのだから、もうよかろうと思っていた。しかし、日本で出版された「ちびくろさんぼ」をコピー（一部分）して、一覧表に整理してみたところ意外におもしろい。私が見たものだけでも、1907年から100年の間に93種類、それでもまだすべてではない。約70人ほどの作者が文を書き、同じくらいの画家が絵を描いていた。実に雑多な——とあえて言おう——「ちびくろさんぼ」が出版されていたのである。

絵本や読み物のほか、紙芝居、映画、人形劇、オペレッタ、クイズや遊びの本、歌もいろいろ作曲されている。『小二教育技術』1982年10月号に紹介された「…ちびくろサンボがさんぼ、サンボのリズムでさんぼ…」という“ちょっとピンぼけ”な歌は、なんと茨木のり子の作詞だった。

また、トラが3頭しか出てこないものや、トラたちが木の周りを回った末に死んで終わってしまうものなども、それぞれ数点あったし、Once upon a timeで始まる話なのに、「インド」「アフリカ」「南の国」など勝手に国を特定するなど、原作の立場は？と思わせる作品も多々あった。

サンボが食べたホットケーキの数、原作では169だが、日本ではどうなっていたか。戦前は、1907年に出版された対訳式の本「サンボの手柄」が169、『コドモノクニ』の「ザンボーと虎」(1937年)が50。数が出ているのは2点だけだった。戦後は1953年に出た「岩波の子どもの本」の196が最初で、その後はそれに引きずられるように、60年代まで196が多い。「岩波子どもの本」も1978年版では169になっていたが、70年代80年代になっても196という数字を使っている本があったり、潔く(?)50とか100というのがあったり。たかが数字とはいえ、そこからは原作に直接あたっていないものの多い状況が見えてくるのである。

トラのバターで作ったもの、原作ではpancakesだが、戦前は、焼き菓子、ドーナツ、オカシの3種

類のみ。ホットケーキは戦後になって「岩波子どもの本」から始まる。それでも50年代はまだ、おかし、ほかほかけいきなど、いろいろだった。60年代にはほぼホットケーキになり、1968年に初めてパンケーキが登場する。70年代には3分の1がパンケーキ、80年代には半数がパンケーキになった。まるで「ちびくろさんぼ」に見る食文化史である。

「ちびくろさんぼ」からは離れてしまうが、カニグズバーグの『ロールパンチームの作戦』(岩波書店 1974年)が、『ベーグルチームの作戦』に変わったのも、一つの食文化の流れといえようか。実は変わったのを知ったのは最近のことだったので、改めて2冊を見比べてみた。訳者や内容に大きく変わったところは無い。『ロールパン・・・』でも文章の中にはベーグルが出てきていたので、そこも変わりはない。ただ、ベーグルが注釈を読まなければ何だかわからない、注釈を読んでもどんなものか具体的な形が頭に浮かばない、というのでは書名として使えなかったのだろう。ベーグルの店が初めて日本にできたのは1984年。注目されるようになったのは90年代後半だったのだから(『パン科学会誌』1998年7月号)。書名が変わったのは2002年、『カニグズバーグ作品集』刊行のときだった。

印象的なのは、『ロールパン・・・』の「菓草」が『ベーグル・・・』で「ハーブ」に変わっていたこと。ハーブがブームになったのは1984年頃からなので、ちょうど「ロールパン」と「ベーグル」の間の時期だ。『ピーターラビットのぼうけん』(1979年)で、ピーターが飲まれたカミツレももう少し後だったら、カモミールになっていた可能性もある。もっとも、ロールパンだって『食品成分表』(三訂補版)に載ることが決まったのは1978年なのだから(注)、出版されるのがもっと前だったら、『コッペパンチームの作戦』になっていたのかもしれない。

(なみき せつこ：元図書館員)

(注)『朝日新聞』1978年5月3日朝刊／参考資料：

『昭和平成家庭史年表』(河出書房新社 1997年)

帰ってきた図書館員 (53)

—波風を立てたくない?—

山下 青葉

先日、作家の群ようこのエッセイ『かるい生活』（朝日新聞出版 2017）を読んでいたら、「波風を立てたくない？」という一文があった。

彼女が小学生の男の子のいる編集者の女性から最近の子どもは運動会で骨折してしまうという話を聞く。組体操で大怪我をするという話は新聞報道などで大きく取り上げられているが、そういうことではなく、徒競走等直接骨折とは関係ない種目でという。

昔も骨折する子どもはいなかったわけではないが、自転車で転んだとか骨折が納得できるような理由でだったのに、子ども達の骨が本当にもろくなっているようだ。そして、そういう子ども達の共通項が「勉強がとてもしできる子が多い」ということなのだそうです。

別の母親に聞いた話でも、その母親の娘のクラスにそういう子どもがいて、授業参観の時にその子どもの母親に「大丈夫？」と聞いたところ「折ってもすぐ治るから平気」。

納得がいかずさらに聞いてみたところ、その母親は肉や卵が嫌いで、子どもの食事にも肉なしの野菜炒め、コンビニの梅おにぎり、宅配ピザなのだった。

それでは、カロリーは足りていてもミネラル分が足りず、骨折を繰り返すわけだと思い、「これから成長期なのだから…」と言ってみたのだが、「私、肉、嫌いなよ」で終わりで、自分の好き嫌いが優先で子どものことを何も気にしていない母親に怒りを感じたということだった。

やる気がないのは…

さらに、知り合いにこれから何十年も人生が続く子どもが大変なことになってきたとその話をしたところ、その知り合いは子どもの受験に関する生活のアドバイスをしているのだが、「やる気がない」「塾でのテストの成績がどんどん落ちている」という夏の終わり頃の母親の訴えに対して、子ど

もに聴いてみると「疲れる」としか言わない。それで食事の内容を聞いてみると、夏休みなので三食家での食事となるわけだが、朝はバナナ一本、昼はそうめんのみ、夜は肉なしの野菜炒めという内容なのだそうです。

これでは体力がつかないし、やる気が出るわけがないと、母親に注意すると「バナナは糖分補給で体にも頭にもいいって聞いたし、昼は簡単に作れるものじゃないと面倒くさいし、夏は買い物に行くのが面倒なので、冷蔵庫の中にあるものだけで作った」と弁解する。

子どものために買い物くらい行けと言っても面倒くさいの一点張り。裕福な家なので、総菜を購入するとかケータリングを利用すればよいのに「近所に手抜きしていると思われるのが嫌」とのことと、もうどうしようもないという状況である。

幸いなことに、ここまでの母親は主流ではなく、だいたいの母親は反省はするのだが、何を作っているかわからないので、メニューを書いて作り方を教え、食事らしい食事を摂るようになると、子どもは元気を取り戻して成績も上がるのだそう。

そしてまた、子どもも食べたいものを親に要求するということがなく、与えられたものを黙って食べるだけ。親子の間で波風を立てたくないという気持ちがあるらしいのだ。

昔は親子喧嘩など日常茶飯事で、そこでお互いに言いたいことを言っていたわけだが、それががないため、自分のことしか考えていない親は、子どもの気持ちを察することなどあるわけもなく、疲弊してきた子どもをやる気がないと叱っているわけだ。最後は「変な親が多くなったと嘆く彼女に、私もうなずくしかなかったのである」と結ばれていた。

今の世の中ではあり得る

群ようこは前回紹介した『残念和食にもワケが

ある『写真で見るニッポンの食卓の今』（岩村暢子 著 中央公論新社 2017）やそれ以前に出た一連の食卓調査の本は読んでいないと思うのだが、あまりに内容がこれらの本とぴったりしていたのでとても驚いてしまった。

食卓調査に関しては、「取り上げられている例が極端」「調査数が少ない」などの批判もあるようだが、自身の日常生活で起こった出来事をテーマにしているエッセイの中でこういうことが出てくるというのは、もちろん驚く出来事だったから取り上げられたというのはあるものの、今の世の

中ではあり得るという要素があるからという気がする。

「残念和食」の本は、それほどまでに話題になっていなかったようだが、女性週刊誌の「女性セブン」2月1日号で、「あなたも食べてる？「残念な和食」と題した記事で取り上げられていた。

内容は、本で取り上げていた事例の紹介が主だったが、小学校で出汁の取り方を教えるなどの和食に関する授業への取り組みも紹介されていた。

はてさて、今後はどうなっていくのであろうか。

（やました あおば：図書館員）